名寄市立大学の窓から～知への誘い～ vol.17

「地域と大学の相互的活用モデルの創出」

－地域と大学が共に発展する意義とそれを促進する条件（2）－

保健福祉学部　社会福祉学科　教授　瀬戸口　裕二

都市への転入動機は、様々です。就職や結婚などもあるでしょう。親族との関係を考慮したUターンや、再度故郷へ就業を選択する動機もあります。定期異動に伴った、特に地域を選んだわけではないような動機もあるでしょう。人口増を図るためには、ここに「住みよさ」が加わり、名寄市を選んで転入してくるような動機が加わることが望ましいということになります。それが「住みたいまち」なのではないでしょうか。住民に「住みよさ」を実感し、そのことを地域以外に発信されたときに、はじめて「住みよさ」が「住みたい」に変わるのかもしれません。

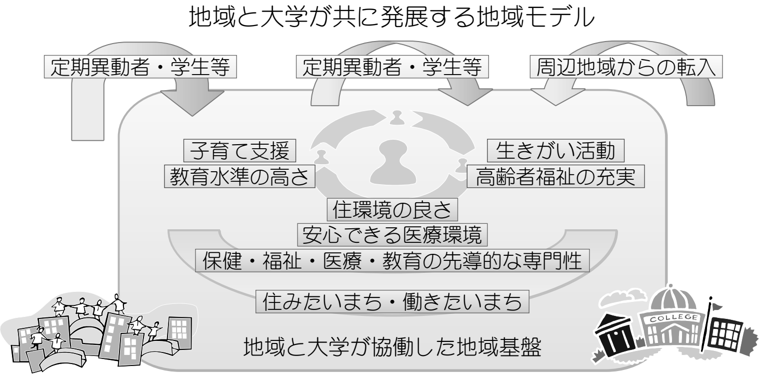
地域外の人々が、積極的な転入動機を持つことと、一時的な転入者が、後になって、ふたたびこの地域に帰ってくる要因となる「住みよさ」とは、何なのでしょうか。

名寄市の小中学校では、年度末に、転勤予定の子どもの数を把握することが、次年度の学級数を決める重要な情報となります。そのことは、自衛隊を中心とした定期異動による転出入者が、学級数決定に大きな影響を及ぼすほど大きな数に上っているということ、異動者の中心が子育て世代であるということを示しています。転入転出率が、道内で二位か三位（札幌市、千歳市など）にあたる名寄市において、この数値は同じ位の人口の都市に比して、かなり大きなものです。このような転入者の現在のニーズと将来のニーズを形成するものが、「住みたい」という要素となると考えます。

ライフステージを見通したときに、子育て世代は、「住環境」「子育て支援」「教育」を中心的なニーズとして持つ世代です。子どもが独立した将来は、「住環境」「高齢者福祉」「生きがい活動」などのニーズを持つようになっていきます。そして、すべてにおいて一貫したニーズが「医療環境」ということになってきます。

これらの要素を実感したときに、子育ての時期に名寄市を選択して積極的に異動してくる人材が、後にまた選択して居住するような、「住みたいまち」の好循環が得られるのかもしれません。

名寄市立大学は、保健福祉と児童期・学齢期の教育を担っていく大学として、将来の地域貢献に応えられる学部再編を進めています。地域と大学が一体となって、子育てや教育の水準と質を高め、安心して子育てできるまちをつくることで、積極的な転入動機を形成できると私は考えています。また、同じように安心できる医療や充実した福祉に基づいた暮らしを構築していくことで、もう一度、帰ってくる住民とのまちづくりが可能になると考えています。学生が、そのようなまちで学び、働きたいと思ってほしいと考えています。人口が3万人弱の自治体が公立大学を持ち、市民と行政と学生がまちの活性化に取り組んでいるまち、それが名寄市であると期待しています。



図書館的話題・展示

図書館では時節に応じて、あるいは特別な行事などに合わせて企画展示を行っています。これまでも新学期には、「大学生、学びの一歩」「ひとり暮らし応援フェア」といった展示をしてきました。

今年4月には、本学の教員がどんな分野を研究しているのかがわかる「本学教員図書セレクト」を本館で展示しました。

分館では「ケアをひらく」と題して、医学書院刊行の『シリーズ・ケアをひらく』全作品をそろえて展示しています。「ケアの未来をひらく」大学として、ケアとは何かを知るための展示を５月半ばまで行っていますので、市民の皆さまも、どうぞご覧ください。貸し出しも行っています。

大学図書館にはこんな図書があります

～～まちづくり・地域と大学に関する図書～～

『学生「まちづくらー」の奇跡　国立発！一橋大生のコミュニティビジネス』
　菱沼勇介/編（学文社）

『地方公立大学の未来』
　高崎経済大学附属産業研究所/編（日本経済評論社）

『生涯学習「地縁」コミュニティの創造　学びを通じた人の絆が新しい地域・社会をつくる』
　瀬沼克彰（日本地域社会研究所）

●詳しい利用案内は本学図書館のホームページをご覧ください。（大学ホームページ＞付属機関＞図書館）

●問い合わせ：本館　01654②4199［内線3114］
　　　　　　　分館　01654②4199［内線2200］　直通電話